

薄幸の小姓（その2）

トリスタン・レルミット

野池恵子訳

16. 薄幸の小姓再び失踪、王子の近衛兵らの中で剣を抜いたために。

日の暮れる頃私は町に戻り、私たちの友人の大貴族の家に厄介になって、その日までの事件のあらましを聞いてもらいました。その貴族は思いやりをこめて私を慰め、うまく調停してあげると約束し、私のたかぶった気持ちをなだめてくれました。そして、翌日にもその言葉を実行に移してくれたのでした。主人は5,6日程前から私の姿をみかけなかったため、私が戻ると、大袈裟な愛撫を何度も繰り返してくれました。また、師の方は私に恐怖心を抱かせるとどれほど危険な結果を招いてしまうか心得ていたため、その時は何時もの厳格さを幾分控えました。そういう訳で、その後しばらくの間、私は平穏な生活を送っていましたが、それが長続きしなかったのはこれからお話する通りでございます。13歳にもなり、分別も多少は備わってきたため、また、恥辱心も穏当な程度に芽生えたため、自分には相応しくないと考える行為にはどんな些細なものにでも、赤面するようになりはじめていました⁽¹⁾。私は読書や教えには以前よりずっと多くの注意を払うようになり、もう賭もせず賭の仲間や蕩児らに会うことも殆どなくなりました。誰もが私の心境の変化に驚き、過去の過ちを現在の誠実さのために忘れかけていたのでございます。ところが、運命の女神は、私のこの反抗に対し、彼女が授乳し滋養を与えたその私が、彼女のもとを去って美德の女神を奉じる素振りをみせたことに対し、怒りを覚えたのでしょうか、迷惑なことにも、彼女の力がどれほど強大かを、私に思い知らせたのです。女神は私から師を取り上げ、もっと高い身分につかせることで、師の支えを失った私を奈落の底にまでつきおとす為の手段を、一層数多く所有したのでした。

余りにも長々とお話しをしあなたの時間を無駄にさせてはいけませんし、また、私のまだ痛みの残る傷痕に触れないでおくためにも、ただこのように申し上げておきましょう、それまでとは違った指導を受けるようになったことに対し、私は強い不満感を抱くようになり、前代未聞の策を弄して主人から数日の間離れておりましたとだけ。私はその時思いました、主人の姿を私の視野から皆が奪うのは私から主人の寵愛を奪うためにだけなのだと。そう考える極度の憂鬱症に陥り、皆が私を私と見分けられなくなってしまうほどになりました。日頃は仲間とともに跳んだり取っ組み合いをしたり走ったりしていたのに、もはや私は夢想に没頭することにしか専心できなくなってしまいました。そして、ある日私が王宮の一つ⁽²⁾に滞在していた時、不運なことに一人の男が私と同じ位深い瞑想に耽りながら、すれちがい様に私にひどく激しくぶつかってきたのです。すぐに私はその深い物思いから我に帰り、相

手の気遣いのなさについて荒々しくものを申しました。すると、男は、私の言葉が彼を侮辱するものと思い、剣を鞘から半ば抜いたため、まるで、私をその剣で突き刺したいと思っているかのようにみえました。私のほうは、剣を所有していず、その男とは違った状況にあったのでした。男の常軌を逸した行為に私の心は激しく動揺いたしました。男は、私の顔付きを見、彼の卑劣さについて私が言ったこと聞き、事態が自分にとって余り満足のいくものにはなっていないと悟って、逃亡しようと考えました。しかし、私は最初に通りがかった従僕のところに走りより彼の剣を求め、たちまちのうちにその無分別な男を捕らえました。近衛兵達は王子がお出かけになった狩りからお帰りになるのを待ちながら、裏庭で列を作っていたために、男はそこを逃場と考えたようでしたが、私は受けた侮辱の恨みを晴らすとする欲求につかれ、狂乱してしまい、その事件についてよく考えてみる余裕が持てませんでした。兵士達がいたにもかかわらず私は剣を大きく二振りをしてみずにはいられなくなってしまったのです。槍で3、4回足下をつかれて止められなかったなら、おそらくはもっと何度も剣を振りおろしていたに違いありません。私のこの破廉恥な振る舞いで大きなよめきが湧きあがりました。3、4人の召使が私を捕らえ監禁しようとしたのですが、私を知っていた連隊の中尉が私を自分で監視すると言って、また、私が虐待してはならない貴族なのだからと言って、彼らの手から私を救い出し、中尉の家に直接連れて行ってくれました。

激昂が去り、怒りの余り沸き立っていた血も、陥った身の危機への恐怖心のために冷えてきて、私は自分の堪え性のなさを後悔し始め、また、私が亡き者にしようとした男の無事を祈り始めました。私に親しげな態度を見せてくれた中尉の、中隊の兵士が時折5、6人相次いでやってきては怪我人の様子を私に知らせてくれましたが、病状はあまりはかばかしくありませんでした。最後に来た兵士の言葉から、外科医のところで怪我人が断末魔の叫びをあげていると確信されたため、私はそこを逃げ出そうと決意いたしました。中尉に、面倒のみついでにもうひとつお願いをし、お城に行って私の事件がどう言われているか聞いて来てもらい、特に、主人のところにおもむき主人がすでに事件について知らされているかどうか、私の許しを主人が得られそうかどうか、を見てきてくれるよう頼んでみました。しかし、その悪い知らせは、吉報を伝えてもらえるかもしれないという希望をすっかり私から取り除いてしまっていたのでした。それは私の命にかかわる問題だと、また、その地から遠ざかることで自分の命を自分で救わなければならないのだと私は思ったのでした。そういう訳で、私はこっそり出発し、かなり広い森⁽³⁾に行き着きましたが、9、10里⁽⁴⁾ほど進んでしまうまでは立ち止まりませんでした。また、そこまでほんの僅かの時間で行ってしまったため本当だとは信じて貰えないほどでありました。私ほど元気はつらつとした男は宮廷ばかりではなくフランス全土を見ても殆どいなかった、とあなたに申しあげておきましょう。また、しばしば私は足を結わいたまま、それまでに出会ったことのある最も背丈の高い男の背の高さにまで飛び上がる、ということもしておりました。その上、幅が少なくとも24ピエ⁽⁵⁾はある水路を一挙に飛び越えていましたし、世界で一番速い馬より早く走ることもできました。そういう訳ですから、私が12、3、4時間もかからずに27、8里の距離を進んだと申し上げても、あなたは私が嘘をついているとはお思いにはならないでしょう。

17. 薄幸の小姓が体験したみずほらしい宿屋での奇妙な出会い

宮廷のあった地を逃げ出した時に私が意図していましたことは、出来るだけ早くどんな知り合いからも逃れたい、また、自分が自分でもわからなくなるまで姿を変えたい、というものにすぎませんでした。そして、私はその二つのことをやりとげたのでございます。セーナが海に注ぐ前に立ち寄る大きな商業町⁽⁶⁾を私は隠れ家とし、そこで数日休みながら人と接触して、長い旅にでる決意を固めました。私はここで自分の名前をすっかり忘れるよう努め、人に尋ねられてもたじろがないように、偽りの家系と偽りの運命に自分をはめこんだのでございます。出てきた時私は殆ど15、6ピストル位しか持っていない非でしたが、その頃になって残っていたのは7、8ピストルに過ぎませんでした。それほど僅かな資金で私は海を横切り、詩人たちがあれほど多くの白鳥に歌を歌わせたアルビオン⁽⁷⁾を見に行こうと決めたのでした。かなり遅くなってから私はこの大きな町を出発しましたが、もうあれほど激しい恐れにとりつかれてはおりませんでしたので、逃亡のあの日の時のような速さでは進まず、乗船することにして第一の港⁽⁸⁾の二里ほど手前までしか行きませんでした。道からかなりはずれた宿屋に引っ込み、疲労のためか、気落ちしていたせいも、殆ど夕食をとらず、随分立派な寝台が二つ置いてある寝室に案内してもらったのです。

今までのあらゆる失寵を頭に思い浮かべながらたっぷり一時間、休んだか休まないころのことでしょうか、宿の女将が部屋の扉の向こうで話をしているのが聞こえてきたのです。女将にひそひそと話かけていた男は一人部屋を注文していたのですが、女将は、少年が眠っている部屋にある寝台一つしかもう提供できる寝床はないと断言していました。それに男が難色を示すと、女将は私のことを保証し、彼女の確信していることを繰り返して主張して、人に迷惑をかけるような様子が私にはないこと、親もとを去って社会を見聞しようとしている子供のように見えること、道中の疲労が激しく朝になっても目を覚ますことはないように思えるなどということまで、話していました。そう言い終わると、彼らは二人して部屋に入って来ました。女将は私に近付いて来て寝台の帳を引き、私が眠っているかどうか（私は眠った振りをしておりました）確かめた後、その用心深い旅人に絹製の私の衣服をみせて、私が、同室になることを心配しなくてはならない相手ではないことを保証しました。男はその部屋で寝ることに同意し、食事をするのに必要なものすべてを持ってこさせました。また、殊に薪をたくさん所望し、なにか重要な手記でも夜を徹して書こうとしているかのようにみえました。なかでも特に、男はフライパンと何個かの卵を頼みましたが、それらは自分流に揚げてみようとしたもので、彼のもとに皿に入れて届けられました。必要な物が全てそろったところで男は部屋の扉をきちんとしめ、蠟燭をもって私の床まで来て私が眠っているかどうかしげしげと眺め、確かめました。私はずっと眠った振りをしておりましたが、その時を利用して私も注意深く男を観察したのでした。火があかあかと燃やされると、持ってきた大きな袋から男が様々な道具を取り出し、音をたてないようにそっと火のそばに並べているのが認められました。火から木炭をたくさん引き抜き、その上で何かを暖め始めました。次にフライパンも火にかけましたが、それは何時ものオムレツを作る時のやり方のように見えませんでした。バターは中で音をたてませんでしたし、なにかの踏み台の上にとつ

ライパンを固定しそっとふいごを使っている音しか、聞こえなかったのです。遂に私がその謎めいたことに退屈しはじめた頃、その立派な紳士はこのようにしてことを終わらせたのでした。彼は所持品の中から円形の鉄の地板を取り出し、同じ材料でできた輪にそれをはめこんで、そこで、フライパンの卵料理を流し込んだのでした。そのすぐ後なかに水差しで水を注ぎました。そして、かなり頑丈な物質を器具から引き出し、また別の機械に入れ、冷却するのです。この時、私は視線をそのあたりに行き渡らせることができず、間諜の役割を耳だけに続けて務めさせておりましたが、男がクランクを回すと、いくつかの輪から鈍い音があがり、また、その輪から別の、何か固い物を力をいれて切断しているような感じの音が、断続的にしてくることが、明らかになってきたのでございます。ここまでくると私の好奇心はすっかり目覚めました。片側を下にして寝ているのに疲れた者が反対側を下にしようとするかのように装って、私はうめき声をあげ伸びをいたしました。こうしたのは、身を起こし帳の閉じ目から一体男が何をしているのかもっとよく見ようとしたためなのでした。私が寝台で寝返りをうってたたた音を聞き、その律儀な職人は自分の音をとめ、私が寝息を高くたてるのを聞くまでは再びその音をさせませんでした。私は余りにも長い間宮廷で育てられ他人には迎合しないようになっておりましたが、この時は大変巧妙に相手に合わせたため、男がそれまで賈の金貨をつくって、こっそりとそれを紙に包んだこと、所持品をすっかり袋に詰めてから、音をたてずに床についたこと、などを見届け得たのでした。このような出会いを体験したことに気付いたときの喜びは、並大抵のものではありません、それこそ私の運命の禍々しさを和らげるために天が贈り届けた救済手段だと私には思えました。私は珍本をたくさん読んで、その中には賢者の石を見出すための聖なる案内書と評価されているものも、含まれておりました。私は皆が、ジャック・クール⁽⁹⁾やライムドゥス・ルルス⁽¹⁰⁾、アルノー・ド・ヴィルヌーブ⁽¹¹⁾、ニコラ・フラメル⁽¹²⁾、および、その他の人々から、ブラガルドン⁽¹³⁾までについて語る話を、すべて知っておりました。従って、私はこの男をその一派に与する者と考え、彼だけが王侯諸氏すべてより申し分なく私の気持ちを楽にしてくれるのだ、と考えたのでした。私はいかに彼に近付くか、いかにして仲間に入れても良いかと思わせるか、についてしか、もはや考えなくなってしまっていました。一晩中、男の信頼を早く勝ちたいという欲望と、私が接近したことで彼が不安に陥るのではないか、気前よく私の手に何か託さないうちに彼は私の手から逃れていってしまうのではないか、という恐怖とを抱き続けたのでした。

18. どのようにして薄幸の小姓は賢者の石を持つ男と知り合いになったか。

まだ夜が白み始めたばかりの頃に、雄鶏の鳴き声が煩かったのでしょうか、あるいは、ひょっとしたら何か秘かな恐怖感にでも悩まされたのでしょうか、既に私の熱愛の対象となっていたその男は、寝床から起きあがり、衣服を着て、袋を肩に背負い、女将に支払いをするため下に降りて行ってしまいました。私は、それと同時に衣服を窓辺に運び、窓をあけ、そこで服を着ながら何時男が出てくるか、どの道を行くかがすぐにわかるようにしたのでした。そこまでは、全てうまく運びました。その現代のアルテフィウス⁽¹⁴⁾は私が行きたいと思っているのと同じ所をめざしましたので、私は女将に清

算し彼を目で追うだけでよかったのでした。男が街道を行くのを私は認めましたので、余り早く近付いて驚かせてはいけない、それよりも、どこかの宿屋に彼が立ち寄るのを待ったほうがよい、そうすれば、通りがかりに同じ場所で何か飲むことができる、そこで旅の道連れになる話かできる、と私は判断いたしました。男は肩に重荷をかついでいたため、その機会はまもなくやって参りました。私は男が最初の村で足を止め、半パイントの葡萄酒を注文して宿屋の入口にあった石の上に腰をおろすのを見たのでした。男が間もなく葡萄酒を飲みほそうとしていましたので、私は同じ所に行き四分の一パイントの葡萄酒を注文いたしました。それは彼に近づく口実を作るために必要だっただけのもののでございました。私はその時、男に港に行くのかと、葡萄酒を飲みながら尋ねてみましたが、私が聞いたこと全てに対し男はそっけない返事をするばかりで、また、その顔付が余りにも厳めしかったので、殆ど絶望してしまいました。宿の部屋であれほど彼に怪しげに感じられた少年がこの私だとわかってしまったに違いない、と私は思い、男が口を閉ざそうとしている秘密を聞かせてもらえそうな方法について、あれこれ考えてみました。ところが、私がそうやってずっと男の目の前にいたために、一瞬のうちに彼は姿をくらましてしまったのです。あつという間に男を見失ってしまいましたので、私は、男が何か魔法を使って飛び去ったのではないかと恐れ、心が凍りついてしまうような気がいたしました。私はこの恐怖心から我を忘れて、男を見失った場所まで走って行きましたが、そこからは下り坂が始まり、また、道も窪んで曲がりくねっていることが明らかになりましたので、すぐに一息ついて元気を取り戻しました。そして、考えの足りなさを自らに責めたのです。しかし、ずっと下まで下り平地一帯をみはらすことができるところまで行っても、男の姿を見出すことができなかった時は、あなたにはとても説明できないほどの絶望感を、味わいました。私は帽子を地面にたたきつけ、髪をひっぱりひどく凄まじい叫び声をあげたため、この時の私の姿を見た人は誰でも、私を悪魔にとりつかれた男だと見たに違いありません。自然の要求を感じて道からそれただけだった件の男は、きっと私の騒がしい叫びを何か聞いたに違いなく、私に意図することがあると予見して、私から逃れようと彼も意図したのでした。私は男を見失ったのではないかと恐れながら、曲がりくねった道を注意深く下って参りましたが、一方、男の方は、その窪地の道を私の後方から登って来て、高みに達した時に立ち止まり、私を観察し私がそのまま先に進むかどうか確かめていたのでした。ところが、その時、もう私は破滅したのではないかとあって、たまたま、歩き始めた地点を突然振り返ったのです、そして、重い荷物を背負ったあの男が再び目に入ってきたのでした。男を見ると、私のなかにあふれていた悲痛な苦しみが、歓喜と期待に席を譲り、同時に、それらに付随して大胆な気持ちが生まれて参りました。もう、自分の思いを果たすのに遠回りはしたくありませんでした。私から逃げ続けてきた男に追いつくやいなや、私が何者であるか、彼の正体を私が何者と見ているかを、大胆にも告白したのでございます。ところが、私があまりにも喜び勇んで話かけ、また、私のそれまでの不幸な状態と男が所有する幸福な状態を余りにも誇張してみせたために、男は、何か情情的に弱みがなければ、実際はあったのでございますが、そこまで動揺はしなかつたらうに、と思えるほどでした。最初に、男は肩の袋を地面に投げつけ、革帯に差しこんであった剣をもっと自由に使えるようにしたようで

ざいました。私のほうは自分の剣を手に持っておりましたが、男が何をしようとしているのか考えながら、用心深く身構えていました。私があればほど決然としているのを目にしなかったら男は自暴自棄となり、剣を何回か振りおろしていたかもしれません。しかし、かれは小男のうえ、老いと仕事である程度、体を傷めていましたため、私の若さゆえの大胆さには恐れを感じさせられたのでした。彼は、ただ、この不運な出会いに捕らえられ涙のいりまざった嘆きの声を上げるだけでした。私は、男を安心させ、苦痛を和らげてやることしかもはや問題となっていない、とわかった時は喜びで有頂天になりました。あれほど滑らかに話せたことは今までになかったことのように思えます。すぐに私は慰めに満ち、説得力に富んだ調子で雄弁をふるい、その優美さはデモステネス⁽¹⁵⁾の再来か、現代のイソクラテス⁽¹⁶⁾かと思えるほどでした。私はその臆病な人間に、彼が不幸とみる出来事が彼の幸せな運命の特別のはからいそのものによるものだということを、火を見るよりも明らかなように、わからせたのでした。私は自分が名誉を重んじる貴族であると言い、また、彼が秘密を打ち明けてもよいという場合の話だが、私は大変善良な心の持ち主なので、世界中のあらゆる拷問をもってきても決して彼の秘密を私に漏らさせることはできないほどであると述べ、また、彼の後を追って何処までもついて行くつもりであり、彼に一生、他では見られないほどの忠実さをもって、仕えるつもりでいる、と言ったのでした。そして、頭脳明晰で忠実で勇敢でもある私のような男との出会いほど、有益な出会いを体験することは不可能なこと、彼への大変厄介で難しい奉仕の試練を受けるつもりでいること、ただ許しを私に与えて欲しいこと、などを、更に申し述べたのでした。男は煤けたような色をした顔に、哲学者というより鍋釜の製造人というような雰囲気を漂わせて、それら全てのことに対してかなり長い間沈黙しておりましたが、気を早々ととり直し、どう答えるべきかしばらくの間考え、ひどく低姿勢に、非常に巧妙な答えを私に与えてきました。男はどんな恩師のもとで勉強したか、私が羨んでいるその金羊毛を手に入れるのにどれだけの苦勞をしたか、を私に教えてくれたのでした。その巧みな告白を聞いて既に、私は頭の中では数多くの宝を所有したつもりになってしまいましたが、男は続けて、身を震わせるようにしながら、そのような秘密の保持者たちがどこかの王侯に見つかった時に晒された危険について、また、そのことで自由を完全に失うというのは不幸のなかでも最もましなもので、普通は監獄で働かされ衰弱するにまかされるだけでは済まず、秘密を吐かせるために、残酷な拷問にかけられそして命を落とすものなのだとということ、これほど高価な利益は人間の手だけで作りあげられるのではなく、その大仕事の完遂の暁には特別の祝福がなされること、その恩寵は深く考えた末に用いなければ、永遠の呪いがかけられてしまうだろうこと、そこには貧者を秘かに立ち会わせること、大貴族たちは生来野心家で、あちこちに戦争をもたらし、隣国を不当に奪取するための手段しか問わないため、彼らには知らせないようにしなければならぬこと、猛り狂った人々の手にそんな風にして武器を渡してしまうことは許されまじき罪であること、それだからこそ男も身を隠して辛い生活を送り、神の正義により与えられたかくも稀有な恵みを邪な用途に供して奈落の底に、永遠におとされてしまわないよう心掛けていること、男も私の言葉遣いから私が生まれも育ちも悪くはない子供だとかかなりの程度まで認めたが、それでも、私を既にそれほど沢山の寵愛で満たし、更に、男と知り合いに

させてくれた全能の神を、私が決して裏切らないつもりであることを実際に証明してみせなければならぬこと、もし、私が、彼に申し出たように彼の仲間になりたいならば、その殆どの言葉と慣習を知っている、と彼が私に言う世界のあらゆる国々に、私を連れて行ってくれること、私たちはその美わしき旅を聖地パレスティナを訪れることで開始し、この全世界をお創りになった方が安置されている聖墓を礼拝した後、つつがなく世界を遍歴できるような特別な祝福を与えてもらうこと、その他に二つの事を私に希望しているが、それさえかなえられれば男は私を自分の魂の一部とみなし、もう何も隠しだてはしないつもりだ、ということ私に申し出たのでした。

男の話聞いて、私はあまりにも激しい喜びに捕らえられてしまい、それほど素晴らしい幸福に値するために、男が私になすよう望んだ二つのことが何であるかを、なかなか尋ねることができませんでした。やっとな、男はそれが二点からなっているが、その一つは私にとってきわめて快いもので、全く困難なことではない、ということ教えてくれました。もう一方は、剣を自分の胸につきさすのと同じ位過酷なことでありました。男が私に望む最初のは、私たちがこれから行くところの町で、その名を覚えてくれたある神父のもとにおいて、私が自身に関しておおよその告白をするということでした。そして、もう一方は、私が男の言葉を信用すること、英国に渡って彼らの友人の、ある商人のところ彼を待つこと、というものでした。私は男に対し、告白をするという約束は喜んでいたしました。別離ということについては、決してその覚悟はできないと、言明いたしました。しかし、男はずっとそのことについて固執し、重々しく誓いをたてることで私への保証としようとしていました。このようにもめながら私たちは、当初は私一人で行くものと思っていた港に向かい、また、その港も、私たちからはもう半里しか離れてはいないところにあつたのでございました。港につくと、男の命に従って私は男と共に修道院に行き、食事をし泊まりましたが、そこでは私たちは皆から大歓迎を受けたのでした。

19. どのようにして薄幸の小姓は、哲学者が万能の薬と名付けるものを試飲したか、また、二人の別離はどんなものだったか。

パンドラの箱には希望が収められていたが、世の中のあらゆる悪とともにその希望が外に出た時、人はそれが悪なのか善なのか、またはその両方なのか、全く判別できなかった、という話を神話で読んだことが思い出され、その曖昧な記述になにかひどく不思議なものを感じさせられます。

晩になって私たち、その大哲学者と私が寝室に引きあげた時、彼は、神の意志に基づき正しく生きるように、と偉大で神聖な説教を私にし、世間の人に私が立派に見えるようになるための手段を与えると、真正なる約束を私にしてくれました。哲学者は激しく熱意をこめて私に語っているうちに、彼が睡眠中に幻想を見、それがある予言をしたこと、また、重要な出来事の殆どが何時もそのようにして告知されるのだということを、私に漏らさずにはいられなくなってしまいました。私と出会う二日前に男は私の姿が脳裏に浮かぶのを見、また、あの宿に来て二人だけになる以前に私は男の夢に現れたのだが、そして、私の顔の形や輪郭から見ると私は彼に不快感を催すために出現したのではないこ

とが分かったが、一方、私の現れた夢に別の怖い幻想も見たために、私と道連れになり知り合いになるのを回避したのだ、と私に告白したのでございます。この話を聞くと、私は彼の気持ちを安心させるため、また、既に彼に抱いていた誠実なる愛を熟っぽく語ろうとして、言葉が口をついて出てくるままに巧みに返答をしたのでした。私はどんな誓いをするにも涙を流さずにはいられず、また、その涙は極めて有効に働き、男の涙をも誘ったのでありました。このような情愛深い会話をかわし、お互いの心に信頼心が確立されたころ、男は私にもう夜もふけたので、休息をとらなければならないと、忠告いたしました。私は、寝床に飛び込みましたが、男のほうは寝台のあしもとに膝まずき、どうやら夜があけるまで立ち上がらなかったようでもございました。朝、私たちは修道院の庭を一緒に散歩し、私を良き状態に置くための方法について様々なことを話しましたが、それは極めて重要な秘密を私に明かすにあたって男が要求したことで、丸一日を彼はこの聖なる実践に費やしたのでした。翌日、私より先に起きていたその大哲学者は、すぐに衣服をつけるようにと、また、歳月によって弱められ、何らかの腐敗によって変質を受け、何かの暴力によって傷めつけられる自然を、保持するための比類なき方法の最高の傑作を私に見せたい、と言ってきました。その日は晴天で、私は、世界の最も美しい色彩を眺める楽しさを味わうのに、あれ程じっくりと時間をかけたことはございませんでした。

その博学な錬金術師は、両手に陶土でできた小さい壺を持って、中は普通の芳香油のようなもので満たされていましたが、それは極めて珍しい別の物を覆うために壺に入れられていただけなのでした。不快な薬物の下にあった羊皮紙をへらでそっと除き、中から指先大ほどの中味の半分しか入っていない三本のガラスの小瓶をとりだしました。彼は白い布で瓶を一本一本拭い、中に入れた至上の美とも言える物質を硝子を通して私がよく見えるようにしてくれたのでした。

彼が最初に見せてくれた瓶は真珠色をしていましたが、それが余りに美しい光沢を放っていたため、これ程心地好いものはいまだかつて見たことがない、と思えるほどでもございました。丹念に精練された水銀でさえここまでの美しさは持てず、ねっとりした粉末のような感じのものでした。私はそれがどんな特性を持つのか尋ねてみました。

『これは幻のようにたよりないもので、地上に住む人々のうちただはかなさを好む者にとってだけ、この粉末はもっとも堅固な富に匹敵する値打ちを持ち、黄金やダイヤモンドも全く色あせてくるような栄誉を得ることができるのです。いわゆる滑石油⁽¹⁷⁾といわれるもので、美を追い求める女性が大変熱心に欲するものなのです。』

こう言ってから彼は、二本目の瓶を私に見せましたが、中には非常に激しく輝かしく燃える炎の色をした粉末が入られていて、それをみていると退屈もしないでゆうに二時間は過ごせそうな気がいたしました。もはや滑石油しか評価しないその哲学者の口振りから判断すれば、それは、錬金術師によってあれほど探究された賢者の石の粉末であつたに違いありません。しかし、彼が三本目の硝子の小瓶を私に見せた時は、顔面に笑みを浮かべ、最初の二つを検討していた時に示した超然とした態度は全く見せませんでした。瓶の中には貴重な芳香油が一杯入っていて、緋色がかかった色彩をしていましたが、それは、哲学者らが万能の薬と呼んでいるものでありました。私は前の晩に残した葡萄酒少量

をコップに注ぐように言われ、その後、金の針の先端でその薬物をわずかばかり取り出してコップに入れ、一部を飲んでみるように命じられましたが、その学者は、私が大変な心地良さを味わうばかりではなく、かつて感じたことのないほどの逸楽さえ見出すことになろうと、私に請け合っただけでした。葡萄酒を針でかきまわすと、かなり甘い気体のようなものが嗅覚までのぼってきたため、それだけでその飲み物を味わってみたいという気持ちになってしまいました。しかし、唇がコップに触れると、予想とは全く異なった驚異がそこに見出されたのでございます。快い恍惚感のために他のあらゆる感覚を失ってしまいそうになり、私の魂は、身体のあるところから退いて私の舌と口蓋に集中いたしました。私は一口しか飲まず、残りは哲学者が飲むものと思ってコップを差し出しましたが、極度の快楽に浸る余り掴んだ手を緩めてしまい、貴重な飲み物を地面に落としてしまったのです。善良な男は最初面白がりながらその霊薬、その芳香薬を手を掴もうとしていましたが、この事故で脅えてしまい、多分、それを凶兆と解したようでございます。彼は飲みながら何か神経が収縮するような感じがしなかったかと、私に尋ねましたが、私が否と答え、コップを地面に落としたのは喜びで我を忘れただけのことだったと言うと、私が余りにも官能への性向に身を委ねすぎると叱責し、我々の魂は肉欲の支配者とならなければならず、従者となってはならない、と言ったのでした。それと同時に私の両手を取り、掌を返してその一方をじっと見据えたのでした。親指から小指まで半円形に伸びるある線を暫く眺めていた後、頭を揺すりながら、彼はこう言ったのでございます。

『これが、肉欲への性向を示す徴だ、随分辛い思いをお前にさせることだろうな。』

その件については彼に念入りに尋ねてみたいと思いましたが、彼は、もし私が賢明であれば回避し得るような不幸を、予測するだけのものだと言って、そして、別の機会にもっと詳しく話してあげよう、と言い、突然口を閉ざしてしまっていたのでした。

20. 薄幸の小姓と哲学者の別離、どのようにして小姓は海を渡ったか。

私たちがおしゃべりをしていると、修道士が一人来て、私たちのうちのどちらかに面会を求めて男が戸口のところにいる、と告げました。私はそれを聞くと、私を捕まえるために送られてきた者だろうと考え、顔が蒼白になりました。たちまち、私が剣で二突きした男の姿が脳裏に浮かび、あの行為には純粋で高貴なものしか含まれていなかったにもかかわらず、私のなかで意識が恐怖に脅え、動揺するのを、感じずにはいられませんでした。しかし、訪ねてきた男の衣服と顔つきを説明してもらおうと、今度は哲学者のほうが色を失い、私に耳もとでこう言うのでした。

『用があるのは私の方にだ。気がすまないが失礼しなくてはならないようだな、ほんのちょっとの間だけだ。一日のあとの残りは私と別れている時になすべきことをあなたに話して過ごそう。』

私はこの話を聞くと哲学者に言い返し、どれだけこの別れが私の心に衝撃を与えるか示したいと思いましたが、彼はそんな暇は与えてくれず、即刻、彼を待つその男を捜しに走って行ってしまいました。私は遠くからその男がどんな人間か観察しようと思ひ、哲学者の後を追いました。それはひどく痩せた非常に顔色の悪い男で、神について、将来の私のあらゆる至福を作りだし、また、その原因を

供する人、と私が考えていたあの偉大な科学者と、同じ年恰好をしていました。二人はたっぷり一時間ともにいて、その身振りから察すると、何かとても重要なことをひどく熱心に話していたようでした。遂に、最後の挨拶がとりかわされ、その見知らぬ男を戸口まで送って行った哲学者は、私のところに来て手を取り、用はすんだもののやはり三週間の間、どうしても私と別れなければならないこと、約束を反故にしようとするあらゆる努力を試みたが、うまくいかなかったこと、などを私に語ってくれたのでございました。

哲学者がそう決断したことで私は随分辛い思いをさせられ、また、もう既に自分の一部と感じていたその男なしで、海を渡る決心をすることができなくなっておりました。しかし、遅くとも三週間の後にはロンドンに赴く、とこちらをたじろがせるようにして男が私に誓い、また、手紙を出しておいたのでその友人の商人の家で彼を待つようにと熱っぽく懇願するので、私は彼の願いを受け入れました。お金を所持しているかどうか尋ねられましたので、8、10ピストル位しか持っていないと答えましたところ、彼はポケットから15ピストルを取り出し、それも持って行って、向こうで彼を待つ間にラシャの洋服でも作るようにと、私に求めるのです。その上、彼は私に13、4粒のかかなり細かい淡黄色の粉粒を与え、海上でひどく気分が悪くなったら一匙の火酒とそれを少し飲むように言い、それは大変強い強心作用のある、自然とよく融合する物質であり、とりわけ、どれほどの危険性がひそもうと、あらゆる毒に対して輝かしい敵となり、それが効果を発揮している時は我々の心臓や頭脳はどんな種類の毒薬によっても、損なわれることがないのだ、とつけ加えるのでした。私は注意深くそれらの贈り物を握りしめ、町の外まで彼を送って行きましたが、そこで大袈裟に何度も抱擁しあい、お互いに涙をさんざん流しあって、別れたのでした⁽¹⁸⁾。

私が町に戻った時は、もはやそれまでの私ではなくなっておりました。私たちが二晩を過ごした慈愛に満ちた修道院で、皆から私を私と認めてもらうのに大変苦労したのでございます。翌日、私は心から何度も感謝の念を皆に伝え、暇乞いをし、イギリスに向けて出航する船に、幾人かの乗船客と共に乗り込んだのでした⁽¹⁹⁾、その船上で、私がそれまで住んでいた場所と同じ所を、すぐ後に出発したヴァイオリンの楽団が、私と同じようにその船旅をしていると聞いても、不安感など微塵も感じませんでした。私は何時も船倉に居たのでございますが、それは、上甲板を歩き回りに行き、誰か知り合いに会い、私の計画が台無しにされてはいけなないと、恐れたためでありました。

21. 嵐の後、どのようにして薄幸の小姓は、哲学者からもらった粉を実際に用いたか、そして、どのような効果が生じたか。

私たちは、乗船してから丸一日の間悪天候に見舞われましたが、それは突風が私たちを襲い、危うく船を難破させようとしたことから始まりました。誰もがひどく気分を悪くし、上甲板に何人かの客の姿が認められても、とても生きている人とは思えないほどでした。私はと申しますと、船室の下に身を長々と伸ばして横たわり、ただ時折、吐き気を催し口を開くのでした。もはや吐くこともできない有り様でした。親切な水夫が私を抱きかかえ、立たせて、火酒を少量口に含ませてくれませんでした。

したら、私は決して回復することはなかったことと思います。水夫の介抱により気を取り戻した後、私は火酒をもう一杯貰うという条件で何枚かの銀貨を医者にやりました。そして直ちに、その火酒に例の貴重な粉の粒を2、3個入れて飲み干すと、忽ちのうちにすっかり元気になってしまいました。僧院で飲んだものほど良い薫りはいたしませんでしたが、心にも鼻にも心地よく感じられました。水夫の杯にその名残がかなりきつく残ったため、皆がそれを使って飲みたがりました。杯に何かを入れたのは私だという噂が船内に漏れるようになると、その話を聞いた人が私のところに集まって来、それぞれ私を正面きってみつめるのでした。そのなかに、王侯たちのバレーの催しのどれにでも見かけられた、ある音楽家がい、向こうも私をみとめて大声で叫びながら抱擁しに近付いて来たのでございます。

『ああ、どうしてこんな所に貴方は来たのですか。一体どうして、貴方はあの主人のもとを離れたのですか。』と、彼は私に尋ねました。

そして、しつこく質問をし続けるのです。私はそれらすべてに対し冷淡に返答をいたしました。その時、その男の友人が突然男にこう、言ったのです。

『この何とかと言う若い奴をあんた、知っているのか。おい、頼むから、上甲板で死にかけているあの親方を生き返らせるのに、水夫の茶碗に入れたものをちょっと貰えないか聞いてくれないか。あの先生もそんな心遣いをして貰ったら、あんたには随分感謝するだろうよ。あんたも知っての通り、あの人は親切にしてくれる者に不義理を返す男ではないからな。』

音楽家の懇願に負け、私は件の紙切れを再び広げなければならなくなりました。中に何が入っているか見ようとする者たちに押されて、私は危うく窒息しそうになったほどでございます。私の薬は効き目を発揮して親方の満足を得ましたが、親方はそれからしばらくの後、手に糖衣がけの胡桃を持って降りて来、私がかかなり頑強に辞退しているにもかかわらず、そのうちの3、4こを食べさせたのです。

それ以来、私たちは大変仲のよい友人となり、私は肉親に対してできえ思い切ってあてにしようとはしなかった愛情の印を、親方から受け取ったのでした。

船を降りると、私はこの折り目正しい男の道連れとなり、外形がその名の由来となった大都会⁽²⁰⁾をめざしたのでした。彼はある王族の館の司厨長で、英国土に挨拶の手紙を何通か届け、その帰り、フランスに何頭かのギルドン種の雌馬⁽²¹⁾と獵犬を何匹か持って戻るために、かの地に遣わされたのでありました。私は紹介状を持っていましたし、また、訪ねて行く先もありましたが、それでも、この男とただ同じ所について参りました。こうしたのには、私にとってと重大な関心事があったため、この世の最上の幸運を試すためにその意図は曲げることはできなかったのでありました。

(以下次号)

(註)

- (1) ここで、無鉄砲だった幼少年期の終わりが通告されている。
- (2) フォンテーヌブロウ。
- (3) フォンテーヌブロウの森(原註による)。
- (4) pied, 昔の計量単位。約 32.4 cm。
- (5) lieue, 昔の距離の単位。約 4 km。
- (6) ルーアン(ジャンニバチストの註による)。
- (7) 英国(ジャンニバチストの註による)。トリスタンにとって英国への旅は希望への旅だったといえる。
- (8) ディエップ(Bernardin: *Un Précurseur de Racine*, による)。
- (9) Jacques Coeur, 1395~1456, 実業家。地中海, 東方諸国と交易し, 巨万の富を築いた。シャルル七世治下で, 通貨安定に力を発揮し, 1447年, Gros de Jacques Coeur を鑄造している。
- (10) Ramond Lulle, フランス名はレイモン・ルユル, 1235~1315。カタロニアの神学者。『学術総論』はスコラ神秘主義の代表作。錬金術にも精通していた。
- (11) Arnold de Villeneuve, 1235~1313, カタロニアの医師。占星術や錬金術にも詳しかった。彼とともに錬金術は哲学的容貌をおびる。
- (12) Nicolas Flamel, 1330頃~1418, 錬金術師, 賢者の石を得たといわれる。
- (13) Bragardin 錬金術師と思われるが, 未詳。
- (14) Artéphius (原文では Artefius), 1130年頃存命, 哲学者, 錬金術師。1626年に彼の著 *Traité de la pierre philosophale* が, Pièrre Arnauld によって翻訳されている。
- (15) Démosthène, 前 384 ~ 322, アテネの政治家, 弁論家。美辞麗句をちりばめた演説によりアテネの人を魅了した。
- (16) Isocrate, 前 436 ~ 338, アテネの説教家, 弁論家。前 392 年に修辞学の学校を開校し, 多くの弟子を養成した。
- (17) huile de talc
- (18) この哲学者が誰であるかは不明。Bernardin は, ただ, トリスタンがベテン師か贋金造りに会っただけであろう, と推測している。(cf. 註(8))
- (19) トリスタンがこの時期にイギリスに渡ったという確証は残されていない。
- (20) ロンドン。
- (21) 馬の種類, 跑足, 側対歩で進む。

註を作成するにあたり, 中に示したものの他に, 以下のものを参照した。

1. Grand Dictionnaire universel du XIX siècle, Grand Larousse Encyclopédique,
2. Serge HUTIN: L'Alchimie (Collection QUE SAIS-JE)